

R2 第1回有識者委員会 資料

メインエントランスの設計について

■既往計画での位置づけ・対象地の課題・歴史性

- ・ 来園者の滞留等が可能な空間を設ける。
- ・ 東海道（国道1号）の松並木等の歴史的景観との調和を図りながら、邸園文化を象徴する場のエントランス空間にふさわしい修景を行う。
（趣ある佇まいとなる植栽を行う）
- ・ 新築エントランス施設は、旧滄浪閣の北から西側の空間に設け、規模は概ね850～900㎡を想定。
- ・ 国道1号歩道よりも高い位置に新築エントランス施設予定地があることから、多様な来園者の利用に配慮し、高低差の解消が必要。
- ・ 国道1号歩道は来園者の邸園へのアクセス動線とともに近隣住民の生活動線も兼ねることから、快適な通行を実現するため、狭さの解消が必要。

■設計コンセプト(案)

明治記念大磯邸園の玄関口として多様な来園者を迎え入れることに留意しつつ、東海道の松並木等との歴史的景観との調和を図りながら、邸園回遊のプロローグの場であることを印象づける空間とする。

■設計の考え方(案)

機能性

- ・ メインエントランスとして、多様な来園者が最初に訪れる空間であることを踏まえ、ユニバーサルデザインに対応しつつ、来園者の集合離散等の利用形態を想定し広場空間を確保する。
- ・ 広場空間のデザインにあたっては、徒歩が園内移動の中心であることから歩行者動線の確保を主にするが、自動車等でのアクセスにも配慮し、限られたスペースの中で歩車分離等の安全性に配慮しながら多様なアクセスへの対応を検討する。

歴史性

- ・ 大磯が明治政界の奥座敷と言われ、別荘地として発展したきっかけである滄浪閣（伊藤博文邸）の表門のあった位置を正門とし、伊藤博文らが辿った滄浪閣への足取りを感じられるような配置をベースとする。※新築エントランス施設の建築位置とも引き続き調整を行う。

景観性（修景）

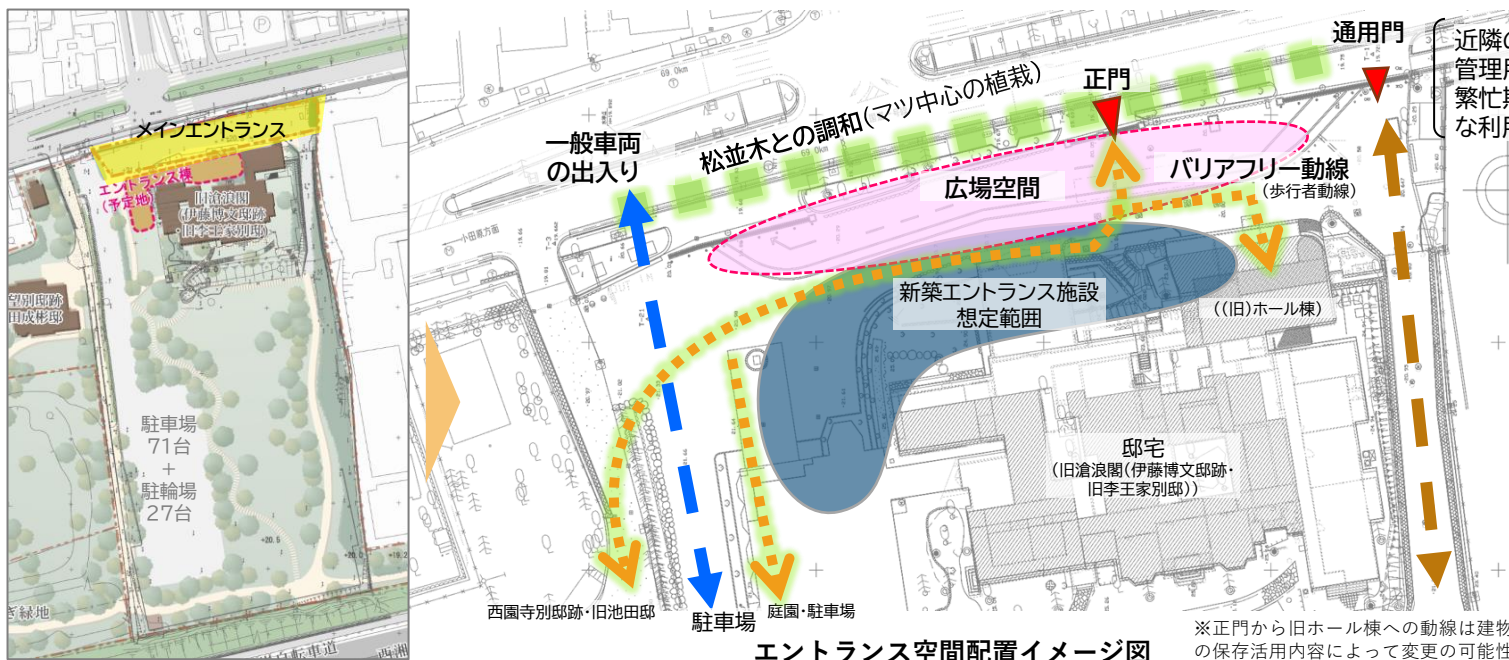
- ・ メインエントランス対象地は、異なる時代の建物が立地するなど本邸園の特徴である“積層する歴史”を表していることから、建物（旧滄浪閣、新築エントランス施設）との調和を図りつつ、邸園の回遊ストーリーの起点に位置することを意識した設えとする。
- ・ 国道1号沿いに植栽（松を中心に検討）を行うことで松並木との連続性を確保し、周辺の景観との調和を図る。
- ・ かつての別荘地としての風格を感じさせつつ、閉園時間等の防犯性に配慮した外周柵等を設置する。

■滞留空間の確保

- ・ 正門から新築エントランス施設前の空間を、利用者（歩行者）が滞留できるような広場空間を設ける。
- ・ 国道1号歩道側から新築エントランス施設などの主要な施設に至る園路勾配を緩くするため、地盤を切り下げ、勾配を5パーセント以下とする。（既存建物（（旧）ホール棟、西園寺別邸跡・旧池田邸）の地盤高は大きく変更できないため、新設エントランス施設想定範囲付近で調整）
- ・ 国道1号歩道の拡幅が難しいことから、正門に加え、旧古河別邸エリア側に通用門を設けることで、繁忙期の歩行者の臨時出入口や管理用車両用の出入りに活用する。

■景観・修景要素

道路植栽を広げ、歩道と公園敷地の間に松を中心とした植栽を行い、既存の松並木との連続性を確保する。

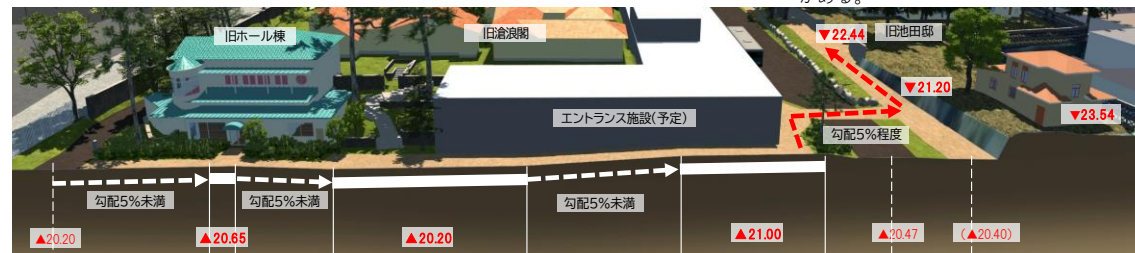


近隣の住環境に配慮しつつ、管理用車両の出入りの他、繁忙期の来園者の利用等限定的な利用を想定



エントランス空間東西の設計勾配(案)

極力緩やかに接続する位置で旧池田邸への横断位置を検討。エントランス施設の地盤高を21.0と設定し、入口付近は平場を設ける。



正門から新築エントランス施設出入口への接続は、歩道から正門周辺の高さを調整し、勾配4～5%程度とする。

デザインの方向性

設計コンセプトから具体的なデザインを検討するにあたっては、歴史性や景観性、機能性など様々な観点からアプローチすることになる。

上記観点をもとに検討を進めると、例えば史実を重視した明治期の表門を再現する案や、旧古河別邸エリアや現存建物の様相に合わせて近代的な設えとする案など幅広い内容が考えられる。

要素の具体性

特定

歴史性

特定

邸園全体

邸園
全体

史実に基づき、冠木門等を再現する案

商業施設時代の入口を活用する案

邸園全体の調和を考慮した近代的な設えとする案

歴史を重んじつつ、公園利用に配慮し、一部要素をモチーフ化する案

エントランス施設に合わせて新たな邸園のイメージを構築する案

■A案 明治期の邸宅の姿(伊藤博文邸)の門を意識したデザイン

- ・伊藤が使った表門の位置に、伊藤邸時代の冠木門、板塀を再現する。
- ・植栽地を盛土し、伊藤邸時代の土塁に植えられた松並木の雰囲気を再現する。

想定使用材(木材(不燃処理)、再生木材も検討)



絵はがき大磯風景 滄浪閣(其一)(明治末期~大正初期)
(大磯町郷土資料館所蔵)

黒い冠木門と板塀により滄浪閣(伊藤博文邸)の外観を再現



正門の外観イメージパース

■B案 4邸宅の象徴として邸園全体のエントランスを意識したデザイン

- ・周辺の景観との調和を図りながら、本邸園内の邸宅の要素を取り入れた新たな門を設置する。
- ・旧古河別邸エリアと同種の石材を門柱に使用し、門扉や外周柵は、旧滄浪閣(李王家別邸)や旧池田邸の洋風の雰囲気に調和するデザインとする。

想定使用材(門柱:石材、門扉・柵:鋼材等)



玄関ポーチの飾り格子を門扉のデザインに反映



大正15/昭和元(1926)年 李王塚、同妃方子静養
(朝日新聞社提供)

旧古河別邸エリアと同じ石材を利用し、邸園としての統一を図る



正門の外観イメージパース

<p>歴史性</p>	<p>古写真や資料をもとに、滄浪閣(伊藤博文邸)の門、塀を再現することで、明治の時代に近づくことができる。</p>	<p>往時の滄浪閣(伊藤博文邸)の正門の位置は踏襲しつつも、往時の門や塀は、個人の邸宅を踏まえたものであることから、機能性等に合わせて門・塀を設計することができる。</p>
<p>景観性 (修景)</p>	<p>明治期の滄浪閣の様相を再現することで、歴史的景観の印象が強くなる。また、板塀前の土塁を模した法面を設けることで、歩道の拡幅以上に視覚的解放感が演出できる。</p>	<p>旧古河別邸エリアとの一体性を確保しつつ、旧滄浪閣・西園寺別邸跡の和洋折衷、洋風の雰囲気を外観に反映し、景観の調和が図られる。</p>
<p>機能性 (防犯性等)</p>	<p>板塀で視線を遮断し、正門までの期待感を演出することができる。 ※塀により死角ができる箇所の防犯対策を合わせて行うことが必要</p>	<p>堅ろうな造りの格子柵を採用することにより、適度な見通しと防犯性の両立を図ることができる。</p>
<p>メンテナンス性</p>	<p>B案に比べて風雨による腐朽劣化等により、補修・更新費がかかることが想定される。</p>	<p>A案にくらべ、耐久性が高く、維持管理コストを抑えた長寿命化が可能。</p>

※材については両案とも仕様及びコストに応じて一部再生材の使用を検討する